『本朝麗藻』全注釈㈣

今浜通隆

〈承前〉

○落蕊封来応万戸　「落蕊」は、「落花」に同じ。「蕊」字は「花のしべ」のことを一般に言うが、ここでは単に「花」を指示していると見てよい。「落蕊」の用例としては、「木根ヲ擥（と）リテ以テ茝（し・香草の名）ヲ結ビ、薜荔（へいれい・香草の名）ノ落蕊ヲ貫ク。」〈『楚辞』「離騒」〉という一文が見える。ただし、この用例の場合、「蕊」字については両説があり、王逸は「蕊、実也。」と言い、朱子は「蕊、花蕚（花ぶさ）」と言っている。今は、朱子の説に従う。なお、「蕊」字のみで「花」を指示している用例としては、「茎ヲ翹（あ）ゲテ蕊ヲ瀵（ひた）シ、穎（ほ）ヲ濯ヒテ裏（み）ヲ散ラス。」〈『文選』郭璞「江賦」〉という一文が見える（この「蕊」字の場合、李善注には、「広雅ニ曰ク、蕊ハ華ナリ。」とある。）。

勿論、この第五句目の「落蕊」は、第六句目の「清歌」の対語であり、ここでは、第三句目の「飄レ林色」を直接的に継承している（「清歌」が第四句目の「出レ谷音」を直接的に継承しているのに対して。）。つまり、「花鳥春資貯」の詩題に即して、まず、第三句目で「花」の色の美しさを歌い、第四句目で「鳥」の声の清らかさを詠じた作者は、この第五句目においては、再び「花」の色の美しさに言及するのである（当然のことに、次の第六句目においては、再び「鳥」の声の清らかさに言及することになる。）。その領聯と頸聯における「花」と「鳥」の順序を図式化すると、AB・A′B′（Aは「花」、Bは「鳥」。）ということになる。

「封来」の「封」は、一定の領土をあたえられて諸侯に封じられることであり、「来」は、ここではあくまでも語末にそえる助字で、動作が起ころうとする意を示す。すなわち、「封来」で、もしも一定の領土をあたえられて諸侯に封じられることになるとすると、というほどの意味にそれはなる。あくまでも、文法的には仮定の条件文を構成しているのであり、他方、内容的には譬喩表現が使用されているのである（すでに指摘したように藤原宗忠の作とされる『作文大体』〈群書類従本〉では、「腰句」〈頸聯〉をその内容的な特色から「譬喩」という言葉で呼称していた。その点からすると、作者が本詩の頸聯〈第五句目と第六句目〉において譬喩表現を使用し

ているのは、むしろ規則通りということになるだろう。）。

本詩（上の10）の場合、第三句目において、「（なぜなら、春は）林にヒラヒラと乱れ散る美しい花ビラをこのように見せることによって人々の寿命をながらえさせます。」と言って、春の財宝の一つである「花」の色の美しさとその価値とを歌った作者は、その第五句目において、その美しさとその価値とを譬喩表現を使用して具体化しようとするのである。また、第四句目において、「（なぜなら、春は）谷にさえずり歌う素晴らしい鳥の声をこのように聞かせることによって人々の人生を豊かにさせます。」と言って、春の財宝の一つである「鳥」の声の清らかさとその価値とを詠じた作者は、その第六句目において、その清らかさとその価値とを譬喩表現を使用して具体化しようとするのである。それでは、どれほどに美しく、どれほどに価値があるのか、また、それでは、どれほどに清らかで、どれほどに価値があるのか、と。ともに、精神的な満足感を物質的な満足感に置き換え、それを譬喩し、具体化しようとするのである。

しかし、本詩の頸聯（第五句目と第六句目）に見える、このような、譬喩表現を使用して精神的満足感を具体化しよう（物質的な満足感に置き換えよう）とする作者の工夫は、決して独創的なものとは言えない。なぜなら、すでに述べた通り、同じ「花鳥春資貯」の詩題をもつ現存の他の三詩にも、すべてそれが認められたからである。例えば、斉信の七律（上の8）の頸聯では、「鳥」の声の清らかさを「余粮」に譬喩し（第五句目）、「花」の色の美しさを「生計」に譬喩し（第六句目）てそれぞれを具体化していたし、また、公任の七律（上の9）の頸聯では、「花」の色の美しい林を「茅土三千戸」に譬喩し（第五句目）、「鳥」の声の清らかな谷を「華山一万金」に譬喩し（第六句目）てそれぞれを具体化していたはずである。さらに、匡衡の同題の七律〈『江吏部集』巻下〉の頸聯でも、露を結んだ「玉顔」（花）の色の美しさを「光万顆」に譬喩し（第五句目）、霞にかくれた「繡羽」（鳥）の声の清らかさを「直千金」に譬喩し（第六句目）てそれぞれを具体化していたことを思いだす。

このように、斉信・公任・匡衡の現存の同題詩をながめれば、それぞれの頸聯における工夫が本詩のそれとほとんど同一であることに容易に気付くだろう（たとえ、斉信のそれが他の三者のそれに相違して、「鳥」を第五句目で歌い、「花」を第六句目で詠じているとしても、その違いは第二義的〈技術的〉な問題であり、同一の工夫がなされていることに変わりはない。）。つまり、現存の同題詩のすべてが、頸聯で述べた精神的な満足感を、頸聯において物質的な満足感に置き換え、譬喩してそれを具体化しているのである。本詩の場合はどうか。すでに述べたように本詩の場合にも、「落蕊」（花）の色の美しさを目にすることによる精神的な満足感を、「万戸」の封土を給せられることによる物質的な満足感に置き換え（第五句目）、「清歌」（鳥）の声の清らかさを耳にすることによる精神的な満足感を、「千金」の募銭を与えられることによる物質的な満足感に置き換え（第六句目）られている。その具体化のための工夫は、斉信以下の作品に見られるそれとほとんど変わっていないのである。

なかんずく、その、具体化のための工夫だけではなく、その、譬喩表現の発想までもが、本詩の場合には、公任の七律（上の9）におけるそれらとまるで同一であることにとくに注目する必要があるだろう。精神的な満足感を物質的な満足感に置き換え、譬喩して具体化するというその工夫はいうまでもないが、その譬喩表現の発想までもがまるで同一なのである。

公任の七律の頸聯では、「花」の色の美しい林を「茅土三千戸」に譬喩し（第五句目）、「鳥」の声の清らかな谷を「華山一万金」に譬喩し（第六句目）てそれぞれを具体化していた。これに対して、本詩の頸聯はどうかというと、すでに述べたように、「落蕊」（花）の色の美しさを目にすることによる精神的な満足感を、「万戸」の封土を給せられることによる物質的な満足感に置き換え（第五句目）、「清歌」（鳥）の声の清らかさを耳にすることによる精神的な満足感を、「千金」の募銭を与えられることによる物質的な満足感に置き換え（第六句目）て具体化している。「花」の色の美しさを「万戸」の封土を給せられることに譬喩し、「鳥」の声の清らかさを「千金」の募銭を与えられることに譬喩しているのである。

以上のように、公任の七律（上の9）の頸聯に見えた譬喩表現と本詩（上の10）のそれに見える譬喩表現とは、その発想の点において、極めて近似していると言えるのである。前者の「茅土三千戸」とは、三千戸の封土という意味であったし、同じく「華山一万金」とは、一万金の黄金という意味であった。すなわち、前者の場合も、「花」の色の美しさを三千戸の封土にたとえ、「鳥」の声の清らかさを一万金にたとえているのであり、後者の場合と同様に、それぞれが「封土」と「金銭」という最も物質的なものに置き換えられているのである（ただ、両者の異なる点といえば、形式上のそれぞれの数詞だけで、前者が「三千戸」「一万金」とあるのに対して、後者が「万戸」「千金」となっていることぐらいであろう。しかし、これらの数詞も、前者においても後者においても、それは、ともに不特定多数を意味する数詞でしかなく、決して具体的な数量を意味するものではないのである。それ故に、ここでは、それほど両者の相違を重要視する必要はないように思う。）。

ところで、本詩をはじめとして、現存の同題詩の頸聯に見られる同様の工夫、すなわち、頷聯で述べた精神的な満足感を、その直後の頸聯において譬喩表現を使用して物質的な満足感に置き換え、それを具体化するという工夫は、どうしてなされたのであろうか。どうしてそのようにする必要があったのであろうか。その疑問については、前項の語釈「行路不貧出谷音」においてすでに言及し、その一つの解答として、ここに、例えば、白居易の七律「送陝州王司馬建赴レ任（建善レ詩者）」（『白楽天詩後集』巻九）中にあるような意見が共通に認識されていたからではないか、という想定を用意した。その白居易の意見とは、「養レ静」と「資レ貧」とを詩人の必要条件とみなし、詩人としては、それらを手にできる境遇に身を置くことをむしろ喜ぶべきだ、というものであった。勿論、それは、前者が詩人としての生活に「精神的な安らぎ」を、後者が詩人としての生活に「物質的な豊かさ」を保証してくれるからに違いないが、この、「養レ静」と「資レ貧」との両方を詩人の必要条件とする白居易の意

見が、本詩をはじめとする同題詩の頸聯に投影しているのではないか、と考えてみたわけである。

白居易は、「精神的な安らぎ」と「物質的な豊かさ」との両方を詩人の必要条件とみなし、それらを手にできる境遇に身を置くことの大切さを強調しているけれども、本詩の作者をはじめとして、「花鳥春資貯」の題で詩を詠じた詩人たちの場合はどうか。「花」に目をやり、「鳥」に耳を傾けることによって、確かに、「精神的な安らぎ」を保証してくれる境遇には、現在、身を置いてはいる（その素晴らしさを、各詩人たちは頷聯において強調していた。）。しかし、これだけでは詩人の必要条件を満たしているとは言えないのである。白居易の意見にある、もう一方の「物質的な豊かさ」を保証してくれる境遇には、彼等は現在、身を置いていないからである（現実の官位からして、本詩の作者が最もそうである。）。この、白居易の詩との齟齬を修復する手段として考えだされたのが、頸聯における彼等の工夫であったのではないだろうか。つまり、頷聯で強調した「精神的な安らぎ」を、その直後の頸聯において「物質的な豊かさ」にそれを譬喩して具体化するという工夫、その工夫によって彼等は二つの効果を狙ったのではないだろうか。一つは、勿論、精神的な満足感を具体化してその程度を読者にわかりやすく訴えかけるという直接的な効果、もう一つは、白居易詩との内容上の齟齬を修復するという間接的な効果。これら二つの効果を狙って、頸聯における工夫がなされいるのではないかと思えるのである。

「万戸」は、一万戸もある広い封邑、またはそれを有する「万戸侯」の官職の意。漢制では、戸数一万もある広大な土地を有する大名を言った。

例えば、『史記』には、「孟嘗君ハ時ニ斉ニ相タリテ、万戸ニ薛（せつ・地名）ニ封ゼラル。」〈巻七十五「孟嘗君列伝」〉とあり、「文帝曰ク、惜イカナ、子（し・李広をさす）ノ時ニ遇ハザルハ。如（も）シ子ヲシテ高帝ノ時ニ当タラシメバ、万戸侯ハ豈ニ道（い）フニ足ランヤ。」〈巻百九「李将軍列伝」〉とある。また、『本朝文粋』にも、「然ラバ則チ、父ハ栄班ニ登リテ五品ノ号ニ誇ルヲ得、子ハ初服ニ返リテ猶ホ万戸ノ侯ニ勝ラン。」〈巻六・大江朝綱「申ニ譲爵ニ」〉とか、「彼ノ万戸ノ侯スラ之ヲ貧ル可カラズ。況ンヤ一郡ノ守ニ於イテヲヤ。」〈巻七・藤原行成「返ニ報状ニ」〉とかの用例が見える。ただし、本詩の用例の場合は、第六句目の「千金」の対語であり、すでに指摘したように、その「万」は不特定多数を指示する数詞であるに違いない。ここでは、広大な封土をいただく意であろう。

なお、わが律令制の規定にも、やはり皇族や諸臣に俸禄として賜わった封戸（ふご）のこと、すなわち食封（じきふ）のことがあり、それによると、「凡ソ食封ナル者ハ、一品ニ八百戸・二品ニ六百戸・三品ニ四百戸・四品ニ三百戸（内親王ハ減半セヨ。）。太政大臣ニ三千戸・左右ノ大臣ニ二千戸・大納言ニ八百戸（若シ理ヲ以テ解官シ、及ビ致仕セン者ハ減半セヨ。）。正一位ニ三百戸・従一位ニ二百六十戸・正二位ニ二百戸・従二位ニ一百七十戸・正三位ニ一百三十戸・従三位ニ一百戸。其ノ五位以上ハ、食封ノ例ニ在ラズ。」〈『令義解』巻四「禄令」〉となっている。これに従うと、「万戸」は、太政大臣正一位のそれの三倍強ということになる。

○清歌募得是千金　第四句目の「鳥」の清らかさを承ける。これは、これを耳にすることによる「精神的な安らぎ」、そのための精神的な満足感を、「募銭」を手にするという物質的な満足感の尺度に置き換えて（譬喩して）具体化しようとした一句である。

「清歌」とは、第五句目の「落蕊」の対語で、文字通りに清らかな「鳥」の声を指示する。この場合の「鳥」とは、すでに指摘したように、「鶯」のことであろうから、その鳴き声を、まず「歌」としてとらえる発想の背後には、「舞腰ハ那（なん）ゾ柳ニ及バン、歌舌ハ鶯ニ如カズ（歌舌不レ如レ鶯）。」〈『白楽天詩後集』巻十一「洛橋寒食日十韻」〉というような詩句の存在を考えなければならないだろう。「鶯」こそ最も素晴らしい歌い手である、と白居易も言っている。勿論、その最も素晴らしい歌い手である「鶯」の声を、次ぎに「清」であると改めてとらえなおすためには、例えば、さらに、「鶯声ハ円滑ニシテ耳ヲ清ムルニ堪ヘ（鶯声円滑堪レ清レ耳）、花艶ハ鮮明ニシテ身ヲ照ラサント欲ス。」〈『宋詩別裁集』巻五・丁謂「公舎春日」〉という詩句に見られると同様の発想の存在が本詩の作者にも必要であり、また、「山林ニ入リテ初メテ影ヲ息（やす）ムルヲ喜ビ、朝市ニ趨（はし）リテ久シク生ヲ労スル厭フ。（中略）茲レヨリ耳界（にかい）ハ応ニ清浄ナルベク、見（き）クヲ免レン啾啾タル毀誉ノ声。」〈『白楽天詩集』巻十六「香炉峰下、新ト二山居一、草堂初成、偶題二東壁一。重題其一」〉という詩句に見られると同様の人生哲学とそれによる体験の存在が本詩の作者にも必要であるに違いない。なぜなら、「鶯」の声がいかに「耳ヲ清ムル」に十分なほどになめらかであっても、それに耳を傾ける人がすべからく「耳界」（音のきこえる範囲）を清らかにし、俗念を断たなければ、その「清」を感得することができないと思うからである。今、本詩（上の10）の作者もまた、きっと、最も素晴らしい歌い手である「鶯」の、その「耳ヲ清ムル」に十分なほどになめらかな声に、「耳界」を「清浄」にして一心に耳を傾けているのであろう。

なお、詩語としての「清歌」の用例であるが、「清歌ハ新声ヲ散ジ、緑酒ハ芳顔ヲ開ク。」〈『陶淵明集』巻二「諸人共游二周家墓柏下一」〉という句中などにも見られる。ただし、これなどは、清らかで澄んだ人の声の意に使用されていることに注意。

また、「清歌」の意味には、これまでのような「清らかな歌」ということのほかに、「管絃無しでうたう素歌」ということがある。例えば、「案ズルニ、魏・晋ノ世ニハ、孫氏有リテ善ク旧曲ヲ弘メ、宋識ハ善ク節ヲ撃チテ唱和シ、陳左ハ善ク清歌シ、列和ハ笛ヲ吹キ、郝索ハ善ク箏ヲ弾キ、朱生ハ善ク琵琶シ、尤モ新声ヲ発ス。」〈『晋書』巻二十三「楽志下」〉という文中に見える場合などがそれである。本詩中の「清歌」の場合も、「清らかな歌」という意味のほかに、「鶯」の声を「管絃無しでうたう素歌」と聴き、その意味をも付加させているのではないかということ、これは十分に考えることができるように思う。

「募得」は、第五句目の「封来」の対語。「募」は、『説文』に、「募ハ、広ク之ヲ求ムルナリ。」とあるように、広く求める意。ただし、ここでは「募銭」の意であり、多くの金銭を求めそれを手に入れる意である。あるいは、対語の「封」が、一定の領土をあたえ

られて諸侯に封じられるという意味であったことからすると、この場合の「募銭」とは、「俸銭」（官吏に対して給与される米、または金銭。）の同義語とも考えられる。領土に対する俸銭であるとも考えられる。「得」は、「封来」の「来」字がそうであったように、語末にそえる助字。機会などに恵まれて「できる」意を表わす。すなわち、「募得」で、もしも募銭（俸銭）を求めそれを手に入れることができたとすると、というほどの意味にそれはなる。

勿論、第五句目がそうであったように、その対句であるこの第六句目の場合も、文法的には仮定の条件文を構成しているのであり、他方、内容的には譬喩表現が使用されているのである。第四句目を直接的に継承し、そこにおいて、「（なぜなら、春は）谷にさえずり歌う素晴らしい鳥の声をこのように聞かせることによって人々の人生を豊かにさせます。」と言って、春の財宝の一つである「鳥」の声の清らかさとその価値とを詠じた作者は、この第六句目において、その清らかさとその価値とを譬喩表現を使用して具体化しようとするのである。それでは、どれほどに清らかで、どれほど価値があるのか、と。ここでも、その「精神的な安らぎ」が「物質的な豊かさ」という尺度に置き換えられ具体化されている。

「千金」は、第五句目の「万戸」の対語。「千金」の用法としては、例えば、「吾ハ聞ク、漢ノ我ガ頭ヲ千金・邑万戸ニ購（あがな）フ、ト。」〈『史記』巻七「項羽本紀」〉という一文があり、その注に、「正義ニ曰ク、漢ハ一斤ノ金ヲ以テ一金ト為シ、一万銭ニ当ツルナリ。」とある（なお、この『史記』の引用文中に、「千金」とともに「万戸」が対語として同時に使用されている。それらの使用の同時性から、本詩とのかかわりがとくに注目される。）。ただし、本詩の場合は、第五句目の「万戸」と同様、不特定多数を指示するものと考えてよい。大金、もしくは高価な意。その「鳥」の声は、なんと清らかなことであろう。それは、「精神的な安らぎ」を人びとに与えずにはおかない。その素晴らしさといったら、例えば、「千金」という大金の「募銭」（俸銭）を手に入れた時の、「物質的な豊かさ」に対する満足感、それに匹敵するかもしれない。いや、きっとそれ以上であろう。この場合、そのような意味になる。

「花鳥春資貯」の詩題に即して、「花」と「鳥」とを春の財宝としてとらえた作者は、それでは、それぞれの、財宝としての物質的な価値はどれほどなのか、それを具体的に指示しているのである。そのうち、「鳥」の声の清らかさを、春の財宝としては「千金」にも匹敵するほどだ、と言っている作者のこうした発想の背後には、恐らく、「千金一擲（てき・なげうつ意）シテ春芳（芳香のある春の花）ヲ買ハン。」〈『李太白詩集』巻十三「自漢陽病酒帰、寄王明府。」〉とか、「千金惜シム莫カレ青春（春のこと）ヲ買フニ。」〈『宋詩別裁集』丁謂「公舎春日」〉とかの詩句中に見える、春は千金にもまして素晴らしい、というような発想と類似のものがすでに存在していたに違いない。

○為吾未有陽和徳　「陽和」は、のどかな春の気候の意。春気が融和することをいう。「徳」は、めぐみ・さいわいの意。

例えば、まず、「維（こ）レ二十九年、時ハ中春ニ在リテ、陽和ハ方（まさ）ニ起コル。」〈『史記』巻六「秦始皇本紀」〉という一文が見える。文中の「中春」とは、「仲春」に同じで、その注

に、「正義ニ曰ク、中ハ音仲。古者ハ帝王巡狩スルニ、常ニ中月ヲ以テス。」とある通り。つまり、春二月をいう。春二月になって、今や春気がようやく融和しはじめた、とこの例文は言っているのである。注目される。

次ぎに、「（季春ノ月）是ノ月ヤ、生気ハ方ニ盛ンニ、陽気ハ発泄（はっせつ・発散する意）ス。句者（こうしゃ・地中の昆虫）ハ畢（ことごと）ク出デ、萌者（草木の芽）ハ尽ク達（とほ）ル。以テ内ニス可カラズ。天子ハ徳ヲ布キテ恵ヲ行ヒ、有司（役人）ニ命ジテ、倉廩（さうりん・米倉）ヲ発キテ貧窮ニ賜ヒ、乏絶ヲ振（すく）ハシム。府庫ヲ開キテ幣帛（銭と絹）ヲ出ダシ、天下ニ周（あまね）クセシム。諸侯ニ勉（すす）メテ、名士ヲ聘（まね）キ、賢者ヲ礼セシム。」（『礼記』第六「月令」）という一文が見える。この一文では、春三月になると、「生気方盛、陽気発泄。」すると言っている。ということは、これをさきの「秦始皇本紀」の一文の意味と重ねあわせてみると、以下のようになるだろう。春二月になってようやく融和しはじめた春気が、そのあと、春三月になって生物の活気が盛んになるとともにさらに天地に充満し、発散する、と。「月令」中に見える「陽気」とは、言うまでもなく、生物を活気付けるところの「春気」のことであり、「秦始皇本紀」中の「陽和」に通ずるのである。

春二月になると春気が融和しはじめ、春三月になるとそれが充満し発散する、というのである。春三月とは、春気の発散する時季であるという。ところで、「月令」によると、このような春三月を迎えて、天子は、「布レ徳行レ恵」政策を実施するという。つまり、徳政をほどこし、慈恵につとめるというのである。具体的には、二つの点にこころがけることだという。一つは、役人に命令を発し、米倉を開けて食糧を貧窮者たちに分配させたり、さらに国庫を放ち、銭や絹などの物資を天下に流通させたりすること。二つは、諸侯に説きすすめ、それぞれ名士を招聘させたり、賢者を礼遇させたりすること。以上の二点を、春三月を迎えて天子はこころがけるのだ、と「月令」では言っている。

さて、本詩が詠じられた作文会は、寛弘三年三月二十四日の道長邸でのそれであった（『権記』同日条）。まさしく、本詩が春三月の、それも下旬に詠じられていることを改めて思いおこす必要がある。作者は、眼前に展開する春三月の素晴らしい景色をまず歌った。確かに、それは春三月の素晴らしい景色であった。林にヒラヒラと乱れ散っている美しい花ビラは、人々の寿命をながらえさせるほどだし、谷にさえずり歌う清らかな鳥の声は、人々の人生を豊かにさせるほどだ。前者は、たとえば一万戸の封土を与えられた時のような喜びを感じさせるし、後者は、たとえば一千金の募銭（俸銭）を手にした時のような楽しみを与えてくれる。まちがいなく、眼前の景色は春三月そのものなのである。作者は、そこまで歌って、ふと、その春三月の景色の中に身を置く我が身の上を考える。そして、強い違和感を覚えずにはいられなくなる。なぜか。「月令」の記述との食い違いをそこに発見したからである。

作者は自問自答してみる。季節は、まぎれもなく春三月のはずだ。見れば、確かに、林には花ビラが乱れ散っている。聞けば、確かに、谷には鳥の声が清らかに響いている。これらの風景は、まぎ

れもなく春三月そのものだ。間違いはない。あたりには、春気が満ちあふれている。それならば、あの「月令」の記述は偽りなのか。あの、春三月を迎えると、天子は徳政をほどこし、慈恵につとめるという記述は、偽りなのだろうか。そんなことは、あるはずがない。「月令」の記述に、間違いがあろうはずがない。現に、本日の作文会に小生ごときが招かれている。これは、「月令」の記述に、「（天子）勉二諸侯一、聘二名士一、礼二賢者一。」とあることによるのではないか。しかし、もう一点、「月令」に記述された天子の具体的な施策のうちの、もう一点の方は、いまだ我が身の上に及んでいるとは思えない。米倉や国庫を開放して、小生の如き貧窮者に救済の手をさしのべていただけるという。その救済の手は、いまだ我が身の上に及んではいない。どうしてであろうか。「月令」の記述が偽りであるためなのか。それとも、眼前の春三月の風景がまぼろしだからなのか。いや、二つとも、偽りでもなく、まぼろしでもない。では、どうしてなのか。そうだ、きっと小生の身の上にだけ、小生の身辺にだけ、いまだ春三月が訪れていないためなのだ。小生だけが春三月の来訪をいまだ受けていないために違いない。小生一人だけが取り残されているのだ。眼前の景色、林の花ビラも谷の鳥の声もすっかり春三月の来訪を喜び迎えている。さらに、本日の作文会に同席の、主人の道長をはじめとする人々の晴れがましい満ち足りた様子は、どうだ。春三月の来訪を心から喜び迎えているように見える。それらの人々に比べて、いまだ春三月の来訪を受けていない、一人取り残された小生の哀れさは、どうだろう。

以上が、作者の自問自答であるが、本詩の第七句目の、「為二吾未レ有二陽和徳一」は、そうした、眼前の春三月の景色と、それを目にし耳にしている作者自身の身の上との間に横たわる違和感について言及したものであろう。そして、その違和感は、上記の「月令」の記述から生まれ、導き出されたものであったに違いないと思うのである。

ところで、詩語としての「陽和」の使用例を見てまず注目されるのは、銭起の七律「闕下贈二裴舎人一」〈『唐詩選』巻五所収〉という作品である。それには、「二月ノ黄鸝（くわうり・うぐいす）ハ上林（上林苑）ニ飛ビ、……陽和モ散ゼズ窮途ノ恨ミ（陽和不レ散窮途恨）、霄漢（せうかん・大空）ニ長ク懸ク捧日ノ心（天子への忠誠心）。賦ヲ献ジテ十年ナルニ猶ホ未ダ遇セラレズ、羞ヅラクニ白髪（銭起をさす）ヲ将（もっ）テ華簪（かしん・華やかなかんざし・高官の裴舎人をさす。）ニ対スルヲ。」と詠じられている。この場合、時季は春二月であるが、「黄鸝」の声に銭起は耳を傾けている。そして、なによりも、「陽和不レ散窮途恨」と言っている。勿論、「陽和」とは、この場合も、暖かい春の気候（春気）を意味し（上記の「秦始皇本紀」に、「時在二中春一、陽和方起。」とあった。）、同時に、まもなく（翌月の春三月に）行なわれるであろうはずの天子の「布レ徳行レ恵」〈「月令」〉政策を暗示しているに違いない。銭起も、彼自身の身の上にだけ、いっこうに「陽和」が訪れようとしないことを悲嘆しているのである。彼の場合の、その「窮途恨」とは、具体的には、「献レ賦十年猶未レ遇」ということなのであるが、天子への忠誠心を常に抱きながら不遇な身の上を嘆く銭起のこうした苦しい思いは、まさしく本詩（上の10）の作者・大

江通直のそれにそのままあてはまるのではないだろうか。そこには、「陽和」という同じ詩語が使われているだけではなく、共通体験に基づく同じ「こころ」が詠じられているように思えるのである。

次ぎに、「陽和」の使用例として注目されるのは、白居易の五言長律「自二江州司馬一授二忠州刺史一。仰荷二聖沢一、聊書二鄙誠一。」〈『白楽天詩集』巻十七〉中に見えるそれである。この詩は、作者が、江州司馬から忠州刺史に栄転を命ぜられたことに感謝し、その天子の恩沢の有り難さを詠じたものであるが、その中で、「雷電ハ時令（春という時節）ヲ頒（わ）ケ、陽和ハ歳寒（冬という時節）ヲ変ズ（陽和変二歳寒一）。」と言っている。ここの「陽和」とは、春気の融和する意であるとともに、同時にはっきりと、わが身が忠州刺史に栄転できる喜びと、その有難い天子の「布レ徳行レ恵」〈「月令」〉政策のことを指示していると見ることができる（白居易が忠州刺史を拝命したのは、元和十三年〈八一八〉十二月二十日〈四十七歳〉であり、翌年の元和十四年春に江州を出発し、三月二十八日に忠州に到着している〈花房英樹『白居易研究』一一六頁〉。）。そのことは、対語である「雷電」が、春の訪れを告げる雷鳴の意であるとともに、言うまでもなく、天子の恩命の意に比せられていることによっても、容易に知ることができるだろう。つまり、白居易も、この詩の「陽和」という詩語の中に、春気が融和する意とともに、詩題に見える「聖沢（天子の恩沢）ヲ荷フ」意を付加させているのである。

もう一つ、「陽和」の使用例として注目されるのは、菅原道真の七律「早春、侍二宴仁寿殿一、同賦二春暖一、応レ製。并序。」〈『菅家文草』巻二〉中に見えるそれである。その中で、「春風ト聖化ト惣（すべ）テ陽和ニシテ（春風聖化惣陽和）」と詠じられている。まさしく、ここでも、「陽和」という詩語が「春風」と「聖化」との両方の意に掛けて使用されているのである。すなわち、春気が融和するとともに、春風が吹きはじめ、天子の仁政が執り行なわれるのだ、と言っている。

最後に、「徳」については、すでに述べたように、ここでは、「めぐみ・さいわい」の意であるが、その類似の用例としては、「陽春ハ徳沢ヲ布キ（陽春布二徳沢一）、万物ハ光輝ヲ生ズ。」〈『古詩源』巻三「長歌行」〉などの詩句があげられよう。「陽春」（あたたかな春の時節）が「徳沢」（めぐみ）をもたらす、と言っている。とりわけ、「陽春」と「徳沢」の結びつき方が注目される。

○鬢雪甚寒任陸沈　「鬢雪」は、頭髪に白毛がまじっていることを、頭に雪をいただくことに喩えていう。その用例としては、「漠漠トシテ眼花ヲ病ミ、星星（白いたとえ）トシテ鬢雪ヲ愁フ。」〈『白楽天詩集』巻十「別二行簡一」〉や、「鬢毛ハ病ニ遇ヒテ双ビニ雪ノ如ク、心緒ハ秋ニ逢ヒテ一ニ灰ニ似タリ。」〈同上・巻十六「百花亭晩望夜帰」〉や、「干戈ハ況ンヤ復タ塵ノゴトク眼ニ随フヲヤ、鬢髪ハ還ツテ応ニ雪ノゴトク頭ニ満ツルベシ。」〈『杜少陵詩集』巻十「寄二杜位一」〉などの詩句をあげることができる。また、菅原道真なども、「蹉跎タリ鬢雪ト心灰ト。」〈『菅家文草』巻六「海上春意」〉と言っている。

勿論、本詩（上の10）の場合も、「鬢雪」という詩語は、年老い

た作者の自称として使用されているのである。

「寒」は、「ひゆ・こごゆ」と訓じ、寒さに凍える意。「寒凍」に同じ。なお、意味的には、「寒儒」（貧しい学者）や「寒士」（貧しい人）などの用例に見えるように、「貧しい」意をもここでは掛けている。頭髪にまじる白毛を「雪」に見立てたために、その縁語として「寒」字が使用されているのである。

「陸沈」については、『大漢和辞典』〈諸橋轍次〉に三通りの意味をのせる。今、それらを第一義・第二義・第三義として見てゆき、そのうちのどれが本詩の意味に近いかを考えてみたい。あわせて出典についても考えてみたい。

まず、第一義的には、「陸沈」とは陸に沈む意で、「大隠」（俗世間に住み、表面的には俗人と変わらない生活をしている隠者）のことを指示しているとする。市井に隠れ住む隠者のことである。『荘子』〈「則陽」篇〉には、「仲尼曰ク、是レ聖ノ僕（ともがら）ナリ。是レ自ラ民ニ埋（うづも）レ、自ラ畔（くろ）ニ蔵（かく）ル。其ノ声ハ銷（き）エ、其ノ志ハ窮マリ無シ。其ノ口ハ言フト雖モ、其ノ心ハ未ダ嘗（かつ）テ言ハズ。方（まさ）ニ世ト違ヒテ、心ハ之ト俱ニスルヲ屑（いさぎよ）シトセザラントス。是レ陸沈者ナリ。是レ其レ市南宜僚カ。」とあり、その郭象注に、「陸沈者トハ、人中ノ隠者ヲ、水無クシテ沈ムニ譬フルナリ。」とある。また、『史記』〈巻百二十六「滑稽列伝」〉にも、「（東方）朔曰ク、朔等ノ如キハ、所謂（いわゆる）世ヲ朝廷ノ間ニ避クル者ナリ。古ノ人ハ、乃チ世ヲ深山ノ中ニ避クル、ト。時ニ席中ニ坐シ、酒酣（たけなは）ナリシニ、地ニ拠リテ歌ヒテ曰ク、俗ニ陸沈シ、世ヲ金馬門ニ避ク。宮殿ノ中、以テ世ヲ避ケテ身ヲ全クス可シ。何ゾ必ズシモ深山ノ中、蒿廬（かうろ・草深いいおり）ノ下ナルノミナランヤ。」とあり、その注に、「索隠ニ曰ク、司馬彪云フ、水無クシテ沈ムヲ謂フナリ。」とある。

以上の『荘子』や『史記』の例文に見えるように、第一義的には、「陸沈者」とは、「大隠」のことを言うのであり、市井に隠れ住む隠者のことを意味するのである。しかし、同じ第一義的な意味といっても、『荘子』のそれと『史記』のそれとには、厳密に言って、多少の差異が認められるように思う。それぞれの注には、同じように、「水無クシテ沈ム」者なので、「陸沈者」と言うとあり、両者を同一視している。けれども、その「沈ム」生活態度に、多少の差異が認められるように思う。

同じ「陸沈者」でありながら、『荘子』のそれは（市南宜僚のこととする。）、「自埋レ民、自蔵レ畔。」とあるように、一介の農民として田園中に隠遁しているのであり、「其口雖レ言、其心未二嘗言一。」とあるように、自己の真実の心の中をまったく口外しないのである。ところが、『史記』のそれは（東方朔のこととする。）、「所謂避二世於朝廷間一者也。」とあるように、一人の臣下として宮廷中に隠遁しているのであり、「拠レ地歌曰、陸二沈於俗一避二世金馬門一。宮殿中可二以避レ世全レ身。」とあるように、自己の真実の心の中をあっさりと口外するのである。前者の場合、その「沈ム」場所は、田園中なのであり、その「沈ム」生活態度は、一介の農民として生きながらも、その自己の真実の心の中をまったく口外しないということなのである。ところが、後者の場合、その「沈ム」場所は、宮

廷中なのであり、その「沈ム」生活態度は、一人の臣下として生きながら、その自己の真実の心の中をあっさりと口外するということなのである。

これら『荘子』と『史記』の両者に見られる「陸沈者」についての、その多少の差異にも今は注目する必要があるだろう。なぜならば、そうすることによって、本詩（上の10）の詩語「陸沈」が、もしもこの第一義的な意味を持っているとするならば、そのうちのどちらをより直接的な出典にしているか、容易に想像させてくれると思うからである。それは、言うまでもなく、『史記』の方であるに違いない。なぜか。本詩が詠じられた場所は道長の邸宅であったが、作者が生活していた場所は宮廷の中であったからである。つまり、本詩の場所、その「沈ム」場所はあきらかに『史記』の場合と同じなのである。そして、本詩の作者も、あっさりと自己の真実の心の中を口外しているからである。自分は臣下でありながら、「陸沈者」であると、つまり、その「沈ム」生活態度も、『史記』の場合と同じなのである。さらに、何にもまして、本詩の作者も「儒者」〈『二中歴』第十二「儒者歴」〉であった。この点でも、『史記』の場合の東方朔が、「古ノ伝書ヲ好ミ、経術ヲ愛スルヲ以テ、博ク外家ノ語ヲ観タル所多シ。」〈同巻百二十六「滑稽伝」〉と言われていることと、同様であることに気付く。

本詩の作者も、儒官として宮廷の中に生活し、自己が「陸沈者」であることを口外してはばからなかった。これらのことは、すべて東方朔に共通する。恐らく、本詩の場合、その「陸沈」という詩語がもしも第一義的な意味を持っているとするならば、『史記』の方をより直接的な出典にしているに違いない。

さて、以上のように、本詩の「陸沈」という詩語について考えるにあたって、あるいは、第一義的な意味として、市井に隠れ住む隠者（大隠）のことを指示しているのではないか、しかも、もしもそうであるならば、『史記』〈巻百二十六「滑稽列伝」〉中のそれをより直接的な出典にしているのではないか、とまず最初に考えてみた。

次に、第二義的には、「陸沈」とは、昔を知って今を知らないけれども、わが道を守って世俗に流されないこと（人）を指示しているとする。まさしく、「古ヲ知リテ今ヲ知ラザル」〈『論衡』第三十六「謝短」〉こと（人）を意味する。そして、それは、以下に述べるように、もっぱら儒者を批難する言葉としてその中では使用されているのであるが、本詩の「陸沈」という詩語の場合にも、あるいは、そのような第二義的な意味が付加されているとも考えられる。

上記の「謝短」篇には、儒者の欠点が厳しく述べられているが、その中の一文に、「夫レ儒生ノ五経ヲ業（つとめ）トスルヤ、南面シテ師ト為リ、旦夕（たんせき・朝も晩も）ニ章句ヲ講授シ、義理（正しい意味）ヲ滑習（おさめならう）セシメ、五経ヲ究備スルハ、可ナリ。五経ノ後、秦・漢ノ事、知ル能ハザル者ハ、短ナリ。夫レ古ヲ知リ今ヲ知ラザルハ、之ヲ陸沈ト謂フ（夫知レ古不レ知レ今、謂二之陸沈一。）。然ラバ則チ、儒生ハ所謂（いわゆる）陸沈ナル者ナリ。」とある。

儒者は昔の経典を人々に教授し、それを仕事にしている。彼等は確かに昔の経典については詳しい。これは長所である。しかし、儒

者は経典以後のこと、例えば秦や漢の新しい時代のことについては何も知らない。これは短所である。そもそも、昔を知りながら今を知らないことを「陸沈」というけれども、それでは、儒者こそ「陸沈者」だと言えるのではないか。以上がその大意である。

すでに述べたように、王充はこの「謝短」篇において、儒者の欠点を厳しく指摘している。その欠点の由りてきたるところを、彼は、結論として、「斯レ則チ、坐守シテ師法（先生の教え）ヲ信ジ、頗ル博覧セザルノ咎（とがめ）ナリ。」と言っている。その欠点は、儒者がいたずらに先師の学説にのみ固執し、物事を広く見ようとしないところから生まれるのだ、とまず結論付けている。そのためであろう、儒者には、まず、「古」のことは知っていても「今」のことがわかっていない者が多い。前代の秦のことはともかく、現代の漢のことが少しもわかっていない。「愚子弟」という言葉があるけれども、そのような儒者こそ、「愚蔽人（ぐへいじん・愚かで無知な人）」と言わずして何と呼べよう（然ラバ則チ、儒生ノ能ク漢ノ事ヲ知ラザルハ、世ノ愚蔽人ナリ〈同上〉。）、とまでさらに彼は言い切っている。ここで、「陸沈者」のことを、改めて「愚蔽人」と言い換えていることが注目される。王充にとって、「陸沈者」とは、「古」のことは知っていても「今」のことがわかっていない（時代おくれの）儒者を指示する言葉なのであり、愚かで無知な儒者を批難する言葉なのであった。

しかも、その「陸沈者」であり「愚蔽人」である儒者は、ふつう、「反リテ閉闇（自分の殻にとじこもって、外に出ようとしない。）シテ古今ヲ覧（み）ザルヲ以テ、各自ノ其ノ業トスル所ノ事ノ、未ダ具足セザルヲ知ル能ハザルナリ。二家（儒生と文吏）ハ各（おのおの）ノ短ヲバ、自ラ知ル能ハザルナリ。」〈同上〉であるとも、王充は指摘している。その批難は痛烈である。その「陸沈者」であり「愚蔽人」であることに、儒者は自分で気付かないし、気付こうとしない。それ故に、彼等はまったく始末におえないのである、とまで言っている。

ところで、本詩の作者・大江通直は、まぎれもない「儒者」〈『二中歴』第十二「儒者歴」〉であった。後の〔作者〕の項で詳述するが、彼は、正暦三年（九九二）に文章得業生となってから、式部大輔・文章博士・大学頭を歴任した儒者であった。まさしく、彼は、上記の「謝短」篇中に見える儒者のように、「業ニ五経一也、南面為レ師、旦夕講ニ授章句一、滑ニ習義理一、究ニ備於五経一。」するような人間であった。そのような彼が詠じた詩の中に見える「陸沈」という詩語なのである。そうであってみれば、勿論、謙遜の意としてとる必要があるには違いなかろうが、あるいは、そこに、作者は、この第二義的な意味を持たせているのではないか、と想像されてくるのもやむをえないことであろう。彼は、「任ニ陸沈一」と言っている。この「陸沈ニ任（た）フ」という言葉の中に、彼は、あるいは、以上の王充の、儒者に対する批難の声をだぶらせているのではないか、そのように思えてくる。

例えば、そのような第二義的な意味をも付加しているとする場合、本詩の尾聯は以下のような内容になるだろう。

儒者として宮廷の中に生活し、自分は、そこで「古」の経典を人人に教授する仕事をしている人間である、とまずみずからの立場を

納得する。しかも、いまではすっかり年老いてしまい、頭髪の白さが痛ましいほどの自分になってしまった、と次ぎに現在のみずからの状態を了解する。そのように自分の立場と状態とをまず納得し・次ぎに了解した後で、作者は改めてそれまでの自分の不遇な人生を顧みるのである。その儒者である自分、その自分に一人だけいまだ春の恵みが訪れないのは、いったいどうしてなのだろう。それは、やはり、自分が、「古」のことを知っていても「今」のことがわかっていない（時代おくれの）儒者だからであり、愚かで無知な儒者だからであるに違いない。あの、王充がかつて儒者に対して放った批難の言葉、儒者などは「陸沈者」であり、「愚蔽人」である、とのあの言葉、あれこそ今の自分に向かって発せられた言葉ではないのか。そのように考えられてしかたがない、と作者はつぶやく。その場合、以上のような内容になるだろう。

このように、本詩の作者は、「陸沈」という詩語の中に、その第二義的な意味をも付加させ、自分自身を、王充の批難の言葉を甘んじて受け入れざるをえない儒者なのである、と納得し・了解しているとも考えられる。もしそうであるならば、その場合の「陸沈」は、直接的には王充の批難の言葉を指示し、「任」は、その批難の言葉を甘んじて受け入れ、それに耐えしのぶことを意味するものになるだろう。

なお、「陸沈」という詩語におけるこの第二義的な意味を補足説明するために、ここで、『抱朴子』〈外篇十五「審挙」〉の中の一文を見てみたい。そこには、「凡ソ夫レ浅識ニシテ邪正ヲ弁ゼラレザルニ、道ヲ守ル者ヲ謂ヒテ陸沈ト為シ（謂二守レ道者一為二陸沈一）、径（こみち）ヲ履（ふ）ム者ヲ以テ知変ト為ス。俗ノ、風ニ随ヒテ動キ、波ヲ逐（お）ヒテ流ルル者ハ、安（いづ）クンゾ能ク身ヲ徳行ニ復シ、思ヒヲ学問ニ若（したが）ハシメンヤ。」とある。この一文は、恐らく、さきの王充のような意見を直接的に受け、それに対する反論として書かれたものと思われるが、「陸沈」者を「守レ道者」であるととらえ、むしろ、その存在を積極的に肯定している。

「陸沈」者の対語として「知変」者という言葉が右の一文では使用されている。「知変」者とは、具体的に、「俗之随レ風而動、逐レ波而流者。」のことであり、それは、世俗の変化や流行をいち早く読みとり、それと共に変化してやまない者のこととである。そうすると、その「知変」者の対語としての「陸沈」者とは、そのような世俗の変化や流行にとらわれない生き方をする者で、良く言えば独立自尊、悪く言えば時代遅れの人ということになるはずである。そのことは、「守レ道者」の対語として、「履レ径者」という言葉が使用されていることによっても容易に知ることができる。「径」とは「小道」のことであり、ここでは、世俗の変化や流行を追い求める意に使われているに違いない。「道」とは、その反対の「大道」のことである。世俗の変化や流行にとらわれない生き方で、それは、「徳行」を身につけ、「学問」に思いを寄せる人生でもある。すなわち、ここでは、真の儒者のことを「守レ道者」と言っているのである。

このように、『抱朴子』中にも「陸沈」という言葉が見られ、それは、良く言えば独立自尊の儒者、悪く言えば時代遅れの儒者を指示するものとして使用されていた。勿論、『抱朴子』中では、より

強く前者の意で使用されており、それは、より強く後者の意で使用されていた『論衡』のそれとは、その使用態度において多分に異っているように見える。しかし、それは、あくまでも使用態度の違いでしかなく、儒者に対する著者の価値判断の相違でしかないことに注意する必要があるだろう。つまり、「陸沈」という言葉の本質においては、両者には何の相違もないことに注意する必要があるだろう。なぜなら、『抱朴子』中においても、「陸沈」という言葉は、世俗の変化や流行にとらわれない生き方の意味に使用されているからである。これは、「知レ古不レ知レ今」のことの意味に使用されていた『論衡』の場合とまったく同じであると言えよう。

それでは、本詩の作者の、「陸沈」という詩語の使用態度はどうであろうか。『論衡』的であろうか、『抱朴子』的であろうか。儒者に対する作者の価値判断はどうであろうか。消極的であろうか、積極的であろうか。結論を言えば、それは、より『論衡』的であり、より消極的であるように思う。なぜか。本詩の作者の場合、第七句目において、勿論、謙遜の意をも含めているのであろうが、「為三吾未レ有二陽和徳一」とはっきり言い、自分にはいまだ春の訪れがなく、それ故に天子のお恵みをいただけずにいる、と詠じているからである。作者の身の上の不遇を嘆いているからである。また、第八句目において、「鬢雪甚寒」と言い、自分だけはいまだ冬の季節の中に取り残され、その寒さに凍えている、と詠じているからである。世間からいっこうに顧みられないという老年の作者の孤独感と不安感とを訴えているからである。

〈一九八五・八・一〇、未完〉